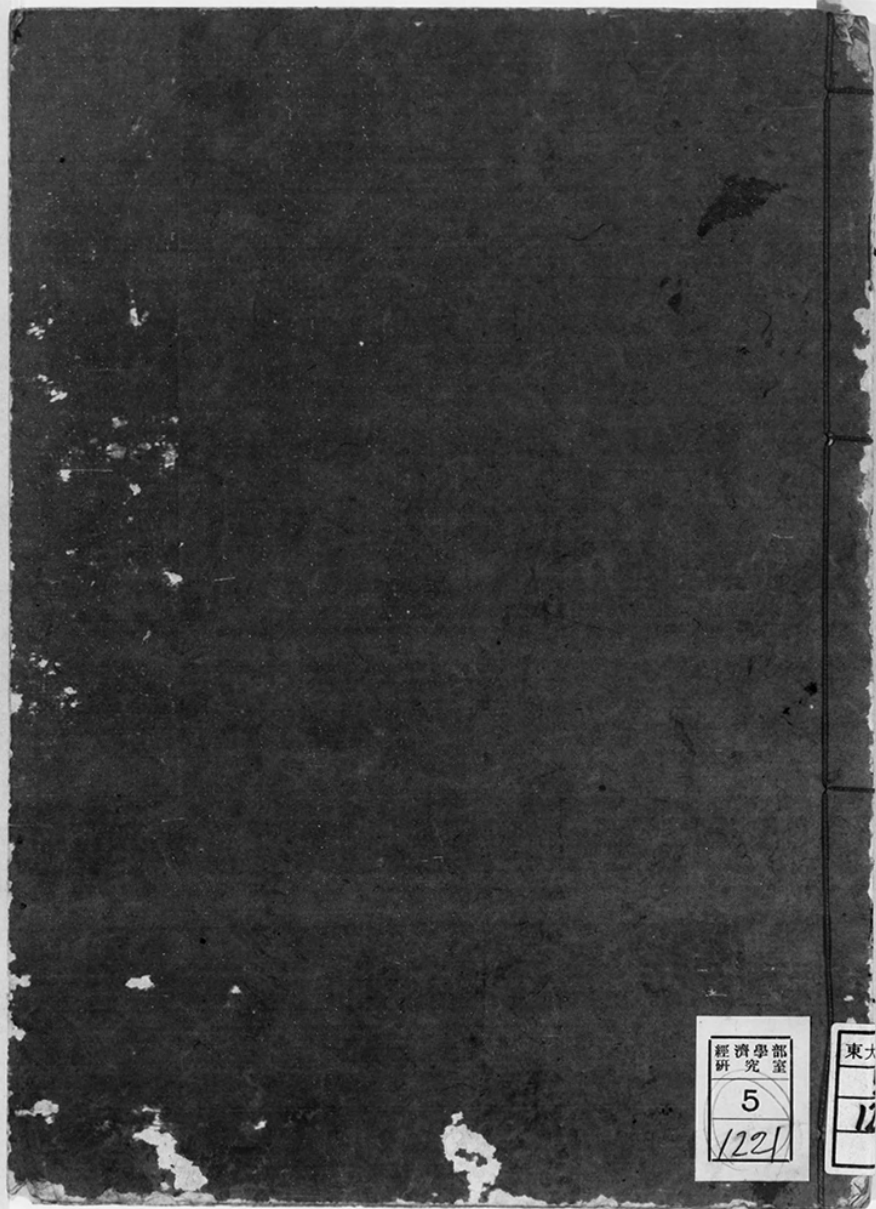


近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。



天書

夫人惟志利者不
係之國家、權操也、
實以恒指拜玉、乃
其係也、奈何、
其尤也、書曰、
庶民之信、今、
此、



38419

釋一途くもははる何能患ひあはる人
僕人今も此の世に留まらぬといふ新氏の
若くは死にゆくも亦たははる能くも成
すべしと有の視聴と云ふはあはるを
斗ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
他は亦たははる能くも成すべしと云ふ
事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
上へと云ふ世に施すは濟世の端なりと
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

夫は此の世に留まらぬといふ新氏の
若くは死にゆくも亦たははる能くも成
すべしと有の視聴と云ふはあはるを
斗ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
他は亦たははる能くも成すべしと云ふ
事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと
上へと云ふ世に施すは濟世の端なりと
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

天保五年甲午年付書 福澤憲治誌



饑年要録

○饑饉ハ異國ノ説ハ五穀不登と饑と謂ハ十穀不登と
饉と謂フ日本亦ても此説ハ本レく成ベ〜今ウ世ウ
唱ル處ハ米穀不熟〜て萬民飢餓ナルこと總々
飢饉といふ是人世第一の患小〜て窮民是ハ遇少て命を
失ふ者ヤウラ次幾年も続ク時ハ國の亂も成祿の事小
テ此上の災い有ベ〜は是天より人の怠と罰〜給フナリ
然る小此患へ數年遠ざルも人怠り奢ル長ド已ラざる
縱小日を送リ年と重祿賜ル者も施スこと思ハズ
〜者も業と怠リ飢饉の艱難ハ昔の時のいふ如て具

斯の如くさきいけ患ふらひても人の心あきまらずさきハ
凶年続くとも有なり人心あらたまり怠を責め奢と惜ま
身とあらと程ふあらハ天災有まじ然しあまこの年と経
飢饉の苦と忘まざる者ハ昔年老て過半死せ其腹幼稚
少て苦しとも知らざれほどの者老ふ故にそきより若
者ハ嘗のく少休へ一頃ふまじ次男く小怠背きて奢
小至るみ依て天より罰し給ふなり一是五十年前後小
て當てる年數なりさきハ年歴乃多少の災あは
人の心怠り奢らハ縦令左ほどの年ハ経たとも天災ある
へ一恐き慄むべしなり

昔天文己午ハ誠小赤曾有の大飢饉の國中の人平ハ
餓死せしとや往昔乃ともさハ其説も詳ならねとも
數百年と経て今ふあるまで己午の飢饉と都鄙一般ハ
唱ふるほどのことなきハ左も有べなり其後數年乃
飢饉をもとの説あきとも詳ならねハ悉くハ記し
近代天明三卯年ハ東國一帯の大飢饉執中奥羽二國
是ハ是又飢死多しとや當國やも奥羽はとも
あらねども大飢饉のことなきハ往來の街ふ死するもの
ゆくら次近と頃予が持菴小奥州の僧住居せし此僧の
物語ハ天明卯年彼の國の饑死多しとせふつと違ふ
ことねく我寺やも且葬のなり日なく後ハ葬禮の營
まなく死人と棺ふ入寺の境内ハ弃置歸る者多かりしと

うや總て田地も持たぬ貧乏者ハ半の土も果しとせり
南部津輕三春の邊ハ取口け飢死多く稚子と海中ハ沉
しやつとも少く次となり又餘人の物語ハ奥州何きの里
やうや有得の農家ありて金銀多し貯へたまとも糧乃
畜へなく心細く折うら旅僧一人来り止宿とせし則一
夜の宿りとなし一め終夜物語のうら糧なくして飢人
しとを歎く僧せめて我ハ出家の身なまぬれ先人の情を
得ても命ハ金ふまぬるまじし身ハ男子伴ハ何んと有れ
主喜んで男子一人僧ハ貯け金子二百兩を添へきす僧
受けて男子を伴ハし其後其家ハありし者主後食
るて死せし僧ハ伴ハし男子ハ助命せしとせりこれハ

数多の金銀財寶を貯へきりとも貯る折ハいいんとも
するに能ハし其の貯へるなく唯妻子乃食糧に用意
する身ハ遠くふかりて疾す死しとせり

○天明六午年ハ西國の飢饉ふして京大坂の町家なにも
も食乏しく飢死の者多しとなり白昼ハ人家ハ飯櫃と
奪ハし逃ぐる者多しとせり強て外へ出る者もなく又大店
もてハ玄米と雜取精とをて外に出をて能ハし店ハ店なり
徳利の中へ米を入き箸をて搦しとて此年中國の邊飢死
夥しく性末の街ハ倒れ伏しとて中ハ一人衣服腰物賤し
うら次同し倒れ死しとてを所の者後ハ改め金子百兩首ハ
かけたりとせり斯ハ金銀を持ちたりも食ふとてハ道路

倒れ死るゝそ法すれゝふわも夥る例も多しき金
銀多きも頼ゝゝ又田禄有とて其年限り小難るゝ飢饉の
助け小成程一掃して金銀もなく田畑わゝ其身乃飢らゝ
のふて妻子と養ふもの何と以て飢を免る事やんや
然きども常の心得て饑令已り畑一畝なくとも小作を務
めて多し次細々中ふも儉約を専として飢饉あひ一時の
明暮忘るゝこと夥く三度の食小向ふと小已と責て食を
延し小と積んでたゞ夥き年と重福く一年二年の食ハ
有べ一悲しむ時小臨み俄小富んとするとも及ばざる半は
唯明暮小せしむを以て小富せしむて危難を免るべ
一貧民とら夥のこゝ豪富の農商いふも更なり夥
かても金銀田畠と貯へ一身いゝと安き事なきは常
心を用ひ天災来らゝ己と全して猶貧人の飢を放ん
事ゆゑまほしむる

○凡五年饑饉の来るゝ少き遅速あれど大概ハ違ふ事な
し又天變地妖の前表のことも第一ハ豊熟チ饑と人乃
心懶惰小なり奢修小長むる時ハ飢饉必近しと知るへ
大史公の曰物盛則衰時極而轉く是天の授なきハ違ふ
なり過し天明の飢饉より五十年の星霜を歴て今天保四
己年又此患あり其端文化文政の頃五穀能安のりて穀の價
摠じて賤く天明の患ハ絶て絶るゝの稀なきハ衆人の心つ
と夥く緩く小日く小怠り月く小奢り僅二十年の間衣食住

三年耕して一年の食ありといふ人々の年々小取入る物の
物成と四つ小割具三つして其年と賄ひ一つと錢となり
譬へ八百依の祿ある者七十五依して其年の衣食の事のつ
目と賄ひ二十五依と計し三年積も七十五依して則一年の
食有り九年積も三三年の食二十年小して十年の物成と
計し別のかくすといふ飢饉小あひても穀と食ふ故に穀也
とて野菜なりと計り食ふやうなるもハニといふ事なり是聖
賢の教して人々の家ハ大小小も以飢饉具外火災水難病難
或ハ葬祭婚姻吉凶小計不慮の有り目有る事ハハニといふ事なり
年々小積蓄けハ何れも不慮の事ありとも行積る事なく人小
儲る事もなく金一家と計るの教なり是後世の人皆事小

行ふべき事なきとも道理を辨ぐる者ハ其程を計りて
各書小居へるも有る人小聖人能はるを教へてやうされハ
此道飢饉小限りする事なり次何もの家小も有事なきハハ
心得なりて叶はぬ事なり然るも萬の難と集人たあふ事なり
穀少て積る事成がらる事ハ其内小飢饉の用意ハ穀と積
貯る所ハ難かり金銀少て貯ふも亦可なり一収具何と何に
難難一飢饉の備へたる事なり是も俗智小計り計る事
なり小計り計る事なり是も漢土小階乃文帝乃と云
長孫平義倉と建て民の家より具負富小隨て毎年
粟麦一石よりと出さしめ是と集め其里の倉小藏めねき
凶年飢饉の時是と出さしめ飢民と救ふ事なり是と辨て

義倉といふ古朝也も 文武天皇乃御宇此法行きてなり
 今も貯穀とて 公儀より在る村に小命せらるるまじく
 貯へる事此類なり是の古法ふりて 春塞 諸侯大夫乃
 家小此法仍るまじくと書遺せし年祿の二十分一と更
 る可ならんとなり是實小至極の法なり人中古以来凶歳の来
 ると考ふに凡五十年前後ふ有り一年小限するもいまだ
 多くに近き内ふ二度続くる有甚き五十年ふ二度有べしと
 覚悟して壁へば百俵の祿有者一年ふ五俵つ蓄へば四十年
 小二百俵五十年小二百五拾俵なり若五十年と思ふ要四十年ふ
 して凶年来らんふ二年の得る所ふ二年の飢僅に備へたる
 べしあるも此法ふより大も小も小限ふ應に二十分一の穀と年

年小積貯く移せしふ心を用ひ飢歳来る時ハ縦使食糧
 匱乏なりとも麻食と食ひ窮民の飢餓ふ及ぶ時或を
 施し或は貸して是難と救ふへきなり

○諸侯大夫の天下國家と治るも農工商賈の一村一家と治
 るも是理要するなり故ふ長たる者ハ常ふ心を用ひ自己
 乃覚悟いふも更なり村里の細民奴隸小も教へ訓して天命と
 畏き奢侈懶惰なく就中飢歳凶年の患ハ是時ふ臨
 る奥へ救ふの所は所災の身らざる前より心得有る者教へ
 導くは肝要なり總て人ハ勿論人々常ふ心掛なくして
 衣食財用匱乏するは時ふ臨るそよりぬにも出あるよの
 なり況や飢餓ふ及び一命ふ抱るにほならは僅の半なり

破を玉り衆人の心一致して一郡一國の亂くなること古今
具例一ちう次齊の管仲言ふ倉廩實而知禮節衣
食足而知榮辱とや鄙俗の諺ふも有るよしなりと云
又貧の盜もいつとも減ふわさきり惟もく要るに思ふ
善きハ多しと知れども其身の貧苦不堪義をわすれ
恩を忘れて畜犬と食する事も有るなりと云
無智文盲乃者亦我身の衣食乏しくはせし乃
除財貯蓄はたのけの心に寛やのふ学びしりしや
仁義の道ふ叶ふとも有るなり是事の心得ある人の長
たるもの恒ふ自其道とけい然して後誠をそめて教え
諭し十ふ一二も効あらは天道へむかひ大なる勲功なり一諸

村里の者小教諭せん小法と云る事可なり人貧民ハ己小
有るも田畠もなく人小借りて耕し取得る處の穀も過平
地主小収めたる如と妻子乃食糧と耕種の際ハ夫ハ
薪と採繩蒔と造り女績紡と細さる業ありて世と
汲るもの身小稼得るより外小有るは物とてならぬ小
飢饉の備へ小畜人やうも何とぞと雖一家の妻子
とふ五ふ人も何と一日小二升の米いぬてけすも郷小
二升乃内して他の雜穀野菜と柳増て用ひハ一合ハ省さ
出とへ一とて僅に一年小三升六升の餘り有り十年の如く
延一積ハ三石六升五十年小ハ十八石四斗入ふして五十五俵なり
是はふ何と成るもたへハ五タリと積ても二十七俵なり

まは妻子けりと養ふ身少く、飢饉の患有まじなり何れも乃
貧者少ても是程の事心と用ひて成るべしといふ有るべし
猶も下人ハ孫文理ハ暗く怠りといふものもその上
日く乃取用之く行儀りからちまは飢饉令三五年ハ積
蓄も其時の所用小ほく、棄空く成事有て難
きものも一も誠とぞ一説論る十人のうち二人
三人守るとのなれふも有るべし其上返く説動々
米の上も行儀り終る其里の風儀もなりけり後ハ怠る
有ても麻の申ふける蓬のく狂れる性も直たれど
に一極もそのくばるべきなりけり乃ち乃ちの物なり
有たさるなり

○四木 桑楮 三草 麻藍 木綿

又作り出して國用辨すといふものも是と樹る小
斟酌り佳穀の登る人々良田ハ樹るべし其土地ハ
より時ふより其利穀よりも増るゆへに恒年ハ價の
貴賤ふより是と難彼と難て利潤なる小依る良田ハ植
るべく世より少く成る小五穀ハ王公より下賤人小至る
命と養ひて最貴なる上なる物なり就中桑と麦とハ國乃
父母ともいふべき物なり此貴き穀の玄月へき美田ハ
穀と植るべく天小逆ふの理小して其植まじりたの二ハ
なり二ハ小桑麻の類常小其利潤大なる事も有るべ
し其れども飢饉の年小隘てハ五穀ハ勿論穀ハ文へく食糧の

助け成へるほどの物に菜蔬菓實小玉るまでも悉く
價貴くして食糧乃助へたりざる物に日用小をくして叶
はぬ物をも買入稀なるがゆへに價賤しきことを棄るが
如く賤しき物と難て賣き穀と雜ふ時はいふ所も買入
るべしや然る年小穀も乏しく入落しといへば糠粃の類
みても多し然ハ飢と助ふ便りあり三川より勝もく大
飢饉といふ小玉りては其所小穀なき時ハ何ほどの價と
出しても穀と雜し成るべくして是程の年少ても少く
取賣ハ有べしと糠粃の補ひあるは是所ハ飢餓と棄
るべし米小ハ少く利ありといふも一大事の折る小
損益多し是より目算小見てある處なきハ此理も教へ

諭して良田小ハ穀と種へ其餘ハ土地乃應不惑と考へ
四本之草と始先惣じて世小益ある物何少くして作り
出さるは是す農家乃事務なるべし

○世小農民の耕稼ハ至る辛苦なるものありてあるも利
得し工商ハ身と労とる事多しにして利と得ること
多しがゆへに今の世の懶惰なるに自ら自然と工商と農
と棄て工商小遷るものありて然る小工商ハ元都會
繁華の地小多く有るものありて田舎桑麻のうら小多く
有るものありて然るは其里小僻るがゆへに其業小く全く
妻子と養ふにふもあらず復半途より農小還り辛苦
するものも能はる終小定まる産業もなく徒小明

空しく暮して去年ハ彼取今年ハ安と居と轉に漂泊
するとの頗る多し是孟子の言ふ無恒産因無恒心と
謂ふ如く定まる業も形く妻子と育む術もなき
後ハその心にもあるものなり是等の輩山年小遇てハ
進退途と多ひいふ人ともあることなり己心より起ると
といひねづら憐む小地より元より小民ハ道理も辨へ
て親も子も辛苦して耕とせんより勞苦なく生涯を
送らんとも増ならんやと簡達ハ若年の子乃に父より
まうする親も思ひたる事小く憐ふも是と教誡す
るに其長たる者の勤ちるべしハ農ハ農工ハ工已々業
とねばまじりと専ら論一導くべし事なり又元より

工商よりいふも田舎に住む者ハ餘カ小耕となり穀
と得んことを務むべしなり事ハ其益薄くせども飢饉
及び妻子奴婢の食すとも悉く難承りて事長し是難
豪富の商賈ハ難て富むも安らむとも凡の工商ハ不時の
用意まで買賣するに成がし難小商賈ハ利小くせしもの
なほハ利息の出る金銀とせし難求め數十年積富る事
成して成るしハ高より利落れ業なきは於更自耕て
富ふべしと肝要なり是ハ予己歳の飢饉小ほのめり見
く知る取なり近きもの商賈して此心得ありて毎年ふ
歩けりも貯蓄ハ安穩して其心ちた者ハ飢及ぶほどの事ハ
なくともいふ事なきをたて等しと云

○凡饑歲凶年の来るハ人の怠りと奢りと不表と知り
縦令前よりよく知るごとく俄に遇ふも前記す如
き心と用いぬるハ亦しも驚くべき小疵といへども昔
より飢饉の凶瑞天變あること例ゆゑ依て其ゆゑと
左ふるゝて後の鑑とて昔天文十四同十五己午乃年ハ古
今の大飢饉なり其年西方小黃雲蔽き草木人面不相映
トて雌黄と塗るが如くなり又寛永十九壬午年大飢饉
なり其前々南海鳴動するごとく穀となり又延寶三己卯年
飢饉なり此二三年摂州伊丹の山ハ十一月躑躅の華咲くと
春乃如く又寅年洛中小大なる雹ふる大なる粟の災の如く
天和元辛酉年飢饉此前年長星雲小頭也又兩頭乃龜出

又江戸みて黄なる蝶飛出ると穀となり享保十七壬子
年飢饉前年耳露降天明三癸卯年大飢饉この年
浅間山焼ると穀々隣國砂降就中關東多く降て
亡村も多くと同今度天保四癸巳年飢饉も同年四月
十二日朝旭日赤きこと糸の如く諸國一般なり時々ほふ
随ひ次第小降く見ゆきとも終日半なり夕陽小玉もて
物小映る影までも赤く斯天變ゆつて凶瑞と顯る玉ふ
ことなきは恐き慎んく新も利慾小惑ふことなく専ら事と
懲り具備へ有るべき事なり

○凶年赤ん前小深山幽谷乃條小窓を結ふこと多くなり
是所謂竹實すらん又一名自然糲といふ阿含經小劫初

自然稗とあり又一説小竹は實と生るハ竹乃稗小して
凶年の兆なり竹實生じれば竹必枯と云々又頼阿乃歌小
世の業は汝山もさや小吹うて秋のる乃風小秋は来小ル
此外古歌小さくは歌小の山と詠一歌多し是と以て是
時ハ書小も有と少て凶年の前小限りたる事とも思ひ
勝もて多に凶年の前小有事ならん遠く昔ハ初ハ次
今近く見る所ハ文政七申年此近隣深山小篠実多く熟
採得と来るとの多し其翌ハ酉乃年飢饉といふほど小
阿乃歌ども頗る不熟小く凡六七分小満ざるこゝろ小
して糧乏し兎者なり小わ次其後天保三辰年由こ同く
篠の實多く熟ハ近御小採得一者有此翌年則ち己の

飢饉なり此兩度歌の如き證ハ古説小違ふところ
またになり此後形表小似く穀小交へて用ふる能腰小
保て身小障るこなくあつても味あつて又数年蓄へて
貴乃喰むこゝろ誠小飢饉の備へ小最宜と云ふ天乃
あつて一むる取つて頼て凶年来るべし頃是と生じて其
備たらしむるならん又是と儀小飢も米乃下に横並ハ
米も貴のこむこもなりとなりさきハ飢と助る良品ナリ
依て多く實の歌と有時々心と多し貯へ自己小も
用ひ他小も與ふ事なり

○又海濱小鳥見多き凶年の兆なりと云ふこと
其虚實と知次山小兆乃頭と事阿乃海小も有べし

事なり天明卯の飢饉前年小も身見多しと聞又天保
已乃飢饉前年より鳥見多しと遠國山家乃小實ま
でも是と商ふ者も其價玉く賤く愛を以て是を此説
も奇なり次後にも飢饉なり其時を以て見たりといふに
去年小飢と云ふ術世小多し然れども用ひて其益乃
厚薄なり又悉く載人下多端小して却て擧小迂闊
こゝろ小依り其切乃其後と省き其直の大小をた
小者なりて飢饉と云ふ乃一助なりんこと

○永井の家毎小有て皆奇なるものなり殊更人数多し
家小俱小多しさば貧窮の者價と云ふてれく乞
賣ひて飢と云ふべし是と聞ふは無大根亦根も亦も

芋いもの多し惣じて菜蔬乃類何小も其有る小物取を
能者て施と加へ食を其に縦令數月もを喰ふては
とも顔色変せ其力の落ることもなく穀と食を其に
てなり是永乃汁なるもの最にも有るなり是良法な
きども然りて易た事少人却て勝せは極難なり
ねち入る者小なりては強て其小の有る永井多し
者ハ勸めり人少施し其能可小いふふなり
濟せ乃一助なり其徳も謂ひべたなり

○粉糠ハ人乃食ふべた物なり其やう小ん得若押て喰へ
毒ありて病とせしと一般小言ひ倣ハりて飢饉小も食
る者其稀なりいふも其性強なり小割法好くして

用ゝ時ハ人乃身小害ハる事モ有ルベシ知ル小元来ナリ也
物小くいとハ薄小替フコトモ有サ畢竟具製衣ノ面
方ハ粉糠と水中小入置バ水赤く色づく此水と去リ又多
替ク那ノ如くい一度もスル程小後ハ水濁ルコトナリかく
水敷一て食コトモバ更小身小障ルコトナリ又味もわく
是げコトと食一てわくハ小蕎麦蕎麦粉粗末ノ粉ナモ
小交へ用ひバ糠乃入一ワケナモ知サズナリ是賣人ト欺
乃大要ナリ

○豆腐と食糧小用也コト良法ナリ具用ひ方品ク有豆腐
乃滓と飯小交て味あくハ又多ク用ひて害也一極滓汁

と水んと一てもハ取時小ハ滓と整ヒ者多く一て是得じ
依て自分小製一滓ハ飯小加へ豆腐ハ菜蔬と加へて味噌け
小煮て用ひバ菜小麦粉ノ摺入小代りて腹を盈ムベシ
豆腐を製スル時滓と分け一川小交へ堅め飯ハ
加つまバ又多と助ルコト多一自己小製スルナラハ孰モ小
するとも自由ナムベシ然モども自ら製スル事モ製方
ハ別ハ一て又器物乃用意事小ナリ物ナモハ貧家小ハ
殊更成ズレタリ是ハ小ハ方便ナリハ年小ハ豆腐
乃滓と賞ハ者ハ多ハモども豆腐を求む者極く少
依ハ豆腐製一て業トスル者閑暇ナリ然モハ豆腐家
小約一て豆と飯一鉢ハても五鉢ハても外敷ハて價を

定々豆腐も澤も皆取たりかやうふする時ハ自ら作も
同くくして製作自中たり予今度冬より春小豆を
すで數月是を用ひて甚益する事を知る是と作ら
むる小豆四升と百文乃貸ふ定先て彼家小豆を以
て人夫と費とを以て所く新道具乃煩ハたなく彼も亦
家業剛暇乃折小條一日ふ二三斗も製し得る若干乃
錢と得る是れ一是米を助る事多くて飢餓ふを
糧と一は如家小豆を用ひて益ある事なり又世小豆を食ふ
用ると身小病と生じて宜くは此後乃虚實い
まだ慥れ福多く食ふ事も何んか極も
豆腐小豆一を用ひるに害なきこと疑ひなり是自ら

用ひて知る要なり又白豆ハ性劣まう黒豆ハ水腫と治
療血と下し百藥乃毒と解とくは多く用て害なり
又豆腐小豆一は但藥毒と解とくは多く用て害なり
人斟酌あるべし又去年小豆を用ひ益あるといふ人
不熟なる年ハ暑中雨多く暑中雨多しは小豆小限り
諸穀不熟なり物小豆ハ冬早の年必不熟く雨多
年能多しものなり是は去年小豆ハ大豆小豆小限り他
乃穀より價極て賤して難易一他乃穀ハ米より貴く
して得るより其得易く益ある事とす小記を

○葛根と採糧小用する是又一例の良法なり諸國山野に多く
生じて採る小易し是と食して害なく功多し熱を解し酒毒を

去り百病ふ効あること諸書小見へたり是と製して用ゆる
 本水は浸し品くけり貧者乃食糧小多く用ふ小精製小せびて根と
 水中小搗と知す猶棄り堀探て細く小刺し飯小加へ或ハ餅小加へて搗く小多く交く
 製方の利有と尋ふ小水小障なり又精製小せん小ハ生少て水浸し水中あて搗洗し其
 入を小粉ゆ依て初めおとす小水少て生汁と能り小ハ滓と去て水煎とべし其製乃精粗小もの
 洗つ小竹葉小刀小少し玉と去り石盤で搗潰し後水洗し小ハ
 多益なり
 唯一向小滓とも小切刺し承小文へ用ふ小なりてハ誠小飢民の

○蕨乃根と採り粉小製し飢小備るこ葛小並へり黄裳

詩小皇天養民山有蕨蕨根有粉民爭採朝暮爭採
 山欲山朋救死豈知筋力竭然まハ蕨根と採て飢と助る
 了和漢異事とこれ飢年小ハ冬より春小あきて飢民小ハ入
 廬舎と造る妻子と推り行日蕨根と葛根とと水煎し
 粉と取餅小作り糧として食と此二種民生小益なりと云
 穀小次つとなつ然る小蕨根乃姓葛粉小なげつとつども食て
 化しつとつ小飢と助る小ハ葛粉より功多しと有り製
 法ハ葛と同一

○薇も蕨と同一く功有り粉小製し時ハ蕨粉小勝しと云
 草薺とつとつ山野小多く生じて古今飢饉の食糧小用事
 事なり其莖と葉ハ薺著積小似て其根ハ薑小近しと云なり其

本草小治、
異國と吾國
と名同一く
いて氣味同
なり其味思
苦れい必毒
ぢん製して
苦味と云ふ
事なりと云
ふ

味は甚苦一此根と探て細く刺し水中に数日曝し其味と去
て飯餅小加へ用て頗る飢民の助となる云々小是と食ひ一
糞と苗代小入まひ苗の生え悪しと云々又河水小曝しねふ
流末の水を田地小うけて稲小障りしと昔より世俗言傳ふ也
其實實不いす詳小辨へねども少く害はなふも水匠と
賞ふ若稲小害あるものなり人乃身小も害ありん、と今
其性を尋探る小本草綱目小甘平無毒とあり時珍の説小
藥品小加へ主治多し事小載せざるも毒有く更小思へんさ
飢民の助と成へり然れども其性甚毒なりは違ふ劣るべし
○皂角子の若葉を摘採飯小交て食ふと益あり惣して草木乃
葉小煮て減るゝ是く一二三四ふる物なる小此皂角子乃

葉は多く減るゝ好く永く用ひて害あることを見ん
亦飢を御さぐの一にあり

○大根の葉芋の葉ハ數十年玄へて傷となり飢饉小饑
飢民を救ふ大益なり其葉小多く貯ふべき中肝要なり

○山葡萄と唱ふ物乃葉と云ひ餅小入又俗小蕎麥の目く
いふ物と專ら用ゝと有り此兩種ハ常小食ふと必大便不
利と云ふ有り身小害有漁て用ゆべし

○飢饉の後必疫癘多し古今同一なり心得有へし

○享保十七壬子年飢饉ゆて其翌年疫癘おらなり、ハ
從公儀疫乃御さぐ又種々の草木を食ふハ小食毒と有
と云ふは奇方と記して海内小觸知らしめ給ひ、事無

人の知る處むきとも見見安くらんかたわ今此書小し載
て具方と左小記と

○一切の毒小わたりたる時塩とぬる水湯ふくみ三飲てし
草の葉を喰ひけりたるふいよくし

○旬くるゝ腹脹痛むわしく水を水ふくよき薬ド
飲めい食たるもの吐しよ

○大麦の粉をいりて白湯わく度く飲てし

○口鼻より血出くくゝむい葱を刻み水一合入能
して第度も飲へー血出る止て後吞てし

○大粒なる黑豆と水ふて能煮一第度も用いてし
魚乃毒小いりたるふいよくし

○赤小豆乃黒硫粉ふて蛤貝一川づ水わく吞
よー獸の毒小ありたるふいよくし

○菌と喰ひけりたるふい葱冬の葉茎とふ生む
唾汁と吞てし

○右ハ一切乃食物の毒小けり又ハ色く乃草木魚菌
鳥獸など喰て煩ふ其害を遁るべし

○時疫わい大粒なる黑豆と能いりてを合小耳仲一女
水ふて煮し時く吞へし

○茗荷の根と葉と搗き汁を取てし

○牛房と搗汁と取茶碗半分程ぐ二度吞且上桑の
葉と一握りほど水わく能わす黄色小成る時茶

碗小水四杯入き一杯ゆき一飲て汗を収めて桑の葉を
枝めてもす

○同熱殊の外強く氣違ひの如く騒々々々一むひ芭蕉
乃根と描けと叙るへ

以上十一箇條に享保十八年御觸書と留置處なり

○飢たる者小食と興ある心得有べし飢て死んとす者小
飯小飯と興へ多く喰へ忽死とすなり依て先米湯を吞
め一日も終て粥と興へ三日を經て後飯と興へ

○前小誌に處に今饑歲小遇ひて貧民飢餓乃艱苦と
見る小忍びは又是を救ふ小力微小して心小すや唯後
の心得ともや拙々と遠く歩近くは見ることこそ其説の

分明なりざるは或試み或探りかく書けらば飢民に
濟ふの補きらんとは書中教諭の語と設けは元他小説
示ふ所意小ありは吾民族ならんとの小書遺んせし
と人乃勸ふ應に具すにいて梓ふなりぬ見る人諺る
ことねく及ばざる取は是を補ひ貧民を濟ふの力とと
らまば是予々幸ととる所なり

右一巻に總て去々々の要書誌と所なり然る小前もいふ
如く飢饉は天の與人の者忘るを懲り給ふ旨いれり今
世の人乃懶惰なりふ引あるは己年の飢饉はまじく災
いんうさ給はば恐るを慎むと人の後の災あんとを慮り
小果して
年年もわたりて今申年ハ已よりも遠き事なり飢饉なりとれ長
思ひ今を改と者天を戒る人より人より小所なり

此の終或人予小昔を日去る年や有らん榮盛星大北へて夏至り
黄道ともつれへ一星色赤く半銅乃如く光彩をくち北へ近りれ
赤道以北の國小帯りて色何れも白く一へ又此星と災星といふ
を恐るるへ半小ぢん又大白星宵に西へ見ゆると長庚といふ朝の東へ
見ゆると啓明といふ此星はく東へ見ゆると其日小先の半北辰の
高きに同じくは三十餘度なり是又常乃例あり
又曰今年其一村の内一家世の者に目をけり者儉約と專に
家内心と人々も農業出稼する者あり小世乃不熟おもわぬ故も取
寄るなり秋の末迄も人並よりハるる増りて更み飢饉といふを知る
小似る百姓わり是小困て是を著る天の憎いたまふ所儉素に天の
愛し給ふ所頻り小覺中にも此外今年穀小少く難く説
有れり事多満なり故小其一二を載るるを志す

天保七年歲次丙申陽月

信陽福岡 福澤氏施本

経済
21